一三千四百七拾五
信五冊物全
1724

京都帝国大学図書之印

序

よ[illegible]の粋者油買うと[illegible]
寄もゆもど[illegible]殿金う下れ
かゝく学文う[illegible]帯よ[illegible]と寄
月れきりをは[illegible]あれ寄れ
聚雪れ[illegible]し灯うまい戒
日の本う悟書い貴ぬ学れと酒

門へ13
弟巻
1724

買も行ぞ四つ時に行き寄の
う前よ去ぬ農夫出すも
見るも瓜に火灯を集て
そそまぐるれい其
焼き下を怨れ持て
琴の瓜て火を焼て業の
いまく暑め筆にそぐ此

一帖を手ちもて社ぐり
きれ花ぬ素ちぐめう
もや桐本にちぢの年俳
山ぢき色と題一玉の
下級解うとちぐしの星に
松ぢ野等見る山の大将も
子供童農みを年も捜まば

心得の穢れ祓ひ給ふ

寛政十一ま[illegible]

都府舎

千代賀[illegible]

大伴の黒主が歌に

あるの落りやすらんがごとし　貫之が

見立てもしかれども歌ふいと悪しく

殆ど　たとへば又相撲人女のやうにて

余れ仏人が通ふ[illegible]

川人波深き堀　祓毎の業の時　[illegible]

何ごとをそこうはりは流さむ　波ひものみ

[illegible]　万仏者　[illegible]

三日くを喰うるなどの云れなりしが
女夫の中に一つをまけ名と百吉が
外て七歩をすだ寄て云れくいらいせむして又の男が横を
太の中と生て小れ中人歳もうけて生て人
此ふを地の中人歳もうけて生て人
屋しく人母父て親又度の仰の地
云仰ふてそ中人堀めるどいいふ多ひそ

鬼のやうかんがぞふて出ぬと都
ひしが信ぬして天ちさぶりさふる
地人堀てきりのうちの横の氣海
人て地ぐてさしたを地人生せ人合して
なしうそてきたと母親の一云に
親又もいやまり入て山ちしぐ全体
貧屋人たふふ母をるたしぐ元寄て
仰を生ぬて親又い坊あしぐ人雲雨
ちしう地ぬりもぬ横白に

そばしくなり今いせんこと物語
母の方よりこれ新文ごの先生をこと物語
のこいしゃ事ふん沙よをば地へ埋て
いたちやつこぶこうもこと物語
元者ひとぶ世人自世世が物語
多しこ物語て人今いはどんとせんこと物語
めゆへこれさのいたちやる通り沙の代
島へなりし埋めてきひきせようど
けしやる第でごばうでなりかば

先家も先家でゆこと物語おまへ埋て
仕早くおりへば世ごろ物語信ん
者ごやふよりて押てこと消こたん
ばごうこと物語消んたり今来島へ
ゆきて こばこと沙を連て野の
道へ出めて元を かやうけ ばこと不思
義や ちゆに考こものあり長こと
乃長ば黄金れ謙なりこと仏でも
物語揚なものし夫婦いこと謙し

一ツ所ゟ[illegible]へ入そだ[illegible]
あれそうして世ようこだ家へひきい
せ物ん万仏いそ鎌を[illegible]
入をしで[illegible]沙鎌とそれ[illegible]
あしば鎌の物語りあるかゝり安くべ
しゝ巻法[illegible]
鎌をしゝ人あるて[illegible]
鎌と絵ゝ沙鎌ゝて入鹿を[illegible]
れ作をけゝ中大久[illegible]

めぐし逢ゝと[illegible]天給て[illegible]を
治めの人もゝし鎌の法ゝ[illegible]
作れでなんでこゝ[illegible]
ゝしあぐ石仏の物べき物ゝ[illegible]
かけて小判ゝ石あゝ[illegible]
夫婦人ゝの[illegible]
あぐ枝も物ゝ橋[illegible]
でを[illegible]
出ゝ人ゝの[illegible]

活計ふるし村中ゞ評判する板女房乃
そのハ先三百姓ハ今ハ俄ニ田畑と共
農業ハ為をさしまゝよりハ旱魃
ゆるしを日やけせぬ雨まにも水損なく
おりゝ仕事元入まて十とせの年月と送り
しが大勝作しなりて彼女房男ハ
聚世やうに為体よりハ
和ゝ方吉ゞ落ち出なを百姓
ふを調歌をかゝげ
けるさまなどかゝ

けるさまなどかゝ年ハ
よふを町人にたち高ひと
ちゞ免楽しく暮さ人ゝて田畑い人ゝ
借しゆゞ夫より京ハ丸六条珠数屋町通に
家を買ひ今ハ百姓ハ名を改め吉助
高ひをちゞめ書状ハ元かぢのゆれハ
書ハ丸道を不業内ハ人ゝ人ゝ
町えを商ゝ仕る者ハ居ぢきハ
売きるゝぶゝ親父の為乃ゝ

賣きけれど先づ代を和を仕入を拵へ
一年も高ひ人庄命して性合を
及ぶ小ぶ掛ケ行ぶ三千貫目あまり出来
その人てぶ
を上代の引迄五千貫目計を拵へ
一年に四八千貫目ほどを損ぶ新文を
祖母もびっくり仰天驚く杖にいふ
新作中くのりを拵へ拾ひ
るでたまし迄人代を清人へ
新者拵ぶ行ぶれ事ぶ新者

ふ〻て清人の腹ぶ立てて
きれで清人もせむ〻ぶ行ぶ新人ぶ
でのやうに作らきまして五十貫目
人金金で代ぶ
出ぶ中ぶ代ぶ清人なぶ
ぶ迄ぶ代ぶ
金のきぶのやぶ
出ぶ清人文あれ者の義新作
と賣けぶ代とのぶ

山吹色

ひろく人名上まで知ぬもの
はなし下されまし隠くらして新くるを
万古見入で今更そやされるといふや
つく〳〵あれ者の若衆を賣るそで
仕給の事ぶ五人詰作ふさ請人でいたれう
そ清人の者をもて長ぎ出ぬ
御〳〵金れ きよ やでいかさ人 ぶ〳〵そうや
仕ぶでごぶる 清人 なら 清人らしうさ
の者仕出ぶ 世金いたさ やねで

たうぶ世ぶ世ぶやたう世義へ新へまて
そ人仕清さやまて〳〵やうる者ふ
祝毎い元分者芸悪深くこまく新又どの
仕のそやうに云いでちられ内くハ沢
ある金じやその清人ぶの身仕出して
まで元さやふハ行びます内ハ清人
屋の教通う百世行為ある身ぶや
ぶり人てあの者ろ百姫の衣新たふ角紙
元上ぶそきて深してやうをうた金を

さきいろいろて一生はたらかしめて後
ゝ横領して御用天窓
ちゝ義ゝや今こそ代官こそ金を出さ
器がはつゝ大きれ器を袋小入て出り
法金こそ出て物を腐して腐るばかりに
地獄又万事の責て手負あさうの掛
横領しし元こそ重ねし重ねし
方こそ百姓のうしかしこ会すれば
百姓もあゝ傍ゝ思業をなげ重ね

変して此高貴物と常人て陰こに居り
元のまゝ人に成りわるぞ所こゝや
行て仕回の万事忘れ人やうに此
後沙汰なれば万事に成ぞや
金を減して此京の町人出て高ひ
ちゝ伝ゝや成て色かゝ人を一人
を書て名刺にして右左高ひ計り
掛書に成ゝ書ゝ きゝかけとく伝
でも是ゝ横を入る会ゝ会ゝ

先壊つて家も壊つて仕廻
ひ給ふも素人がさし又食
物ひしがまて長屋の伺のし地入つて
多し柳の手伺押出虎石町の遊
駿沢の奥に出張れ家と俳仕廻
異彼の羅者し出けの強きし
大地に人を苦むごとく我人よけ恵人を
そけよぶたをしやうかまつぞけうぐ
火事石蒙けし人思ひんに紹四人

その手かりう痛いきつう痛出して
しける元来出かぜのうそけ
者れに出れふまに初を人きこと
たまで全体世上に沙影ひる人き
あるものりう見ホ我ひうおの見痛い
そけまで世方の人れ抜しとう舌作
きるに元来に撫左ひうぬべしけ
む無一

身体山吹色　　巻之二

咲くし色きよく堂々として能雪川たゞきを
見れば老体ふるしたる百古い腰くゝ成人して
まや十七八の数かゝいく寛意の雪わ
かの田舎まれのるすまでも十九ばかり
家人引繼て伝ゞ親の老よりしむ墓よの
解脱のし其くて上られ親の四
りて遠の稀名をしそれ田舎の業
は風流年松とし三味線もすき

かぢや棚のくれ嵐し老人て嫁の方
ゝ爺の涙ぬすみて見るのゝ人源
市氏人万吉い伝ア不見たくめし
男風俗も女ゝ揚ゝ人風俗ゝ
いよゝ遊ぶゝ西の神津ゝ
石ぐるれ小舟ゝてゝくゝと和と
ふゝ初めい西ゝ姫ゝゝ帰ん
ぐしど浦く調ゝ作端祇
墨田の京人流きゝきゝゝ定めゝ

西廊ぐしゝ川行のゆゝくゝ紙屋の
府のく蝿かきふゝこゝぐゝ出来ゝ
粹れ鬱ゝゝ元ゝと入き立い高いと
かゝ書和ゝ強強のくだと拾人
越置物ひぐくゝ親ゝ強強く
ゝ人ぐゝゝゝゝ机をゆゝて
ゝ屋ゝゝれゝ亀角鬱ゝくゝゝ拾い
根が越び鬱れゝ石仏のゝゝれ
墨ゝ人でゝ今日の源走ゝゝれ

きよ入るやうに きめし座がそなはり
ありて 昨年 まれ 義式 をうかがひ
別して 面白 なほ 新居の 響き
風の ゆうべ 出 ある 光い 主師 通り
音曲 きう 音色 吹物 吹 吹 吹 吹 吹 吹
響に 身を 極込 遊び 酒 体
たう 高 ぬ 響 風 て
おし や 響い 身 を たまり れ 不 合
ふ 泊 新 合 表 焼 い 物

屋 へ て 天 せ ま し た ま り ま し い ま り の い
多 数 の 人 の 師 匠 ま り ま し 何 す
う を 師 家 い 人 を 新 う ま の か ま 民 屋 ま
ま り ま で ま う ま か ま し た ま し て
仮 法 の 場 で ま 人 多 す が 出 ま ま し い 物 か
物 じ や ふ ま り て る と 物 新 い 金 紙 ん 得
す 人 き る 形 う ま 文 氏 恐 ま て き び
し き 新 ま ま あ ま し て ま る 他 屋 び
て 物 ま る 行 う ま と 仮 す 氏 い ま

たちかせし小人新小さのいく樹
たのすき人いを愛し道を強い又
おりし叙よりぬ新しく彩の用を
だに考へて人ぬりと三を愛し人を楽し
す沙人腸を人ん式ちつて考ふしみ中に
を石白蓮しつ考ふ所ぬりを荒い何りを
角ふも指ぬ考て根がとけすして氣
でしり彩色人の知をう考りの美し
新表も三表ぬ考て面と年ろ年れ

責て金人のたちと紙り
せ仮でたちめと以人代名和ちさ重で
新表きい紙筆を考ちと又て達ろ
師色を誘ひ出す名けうが先ぬ系河系
きで考で一ぬ紙きと人と筆を人
腰おけそぐを以て眺を何と
先生川端も滝いるでばちきんち
たし山河系と川端のかてしい
表塚も世ちか接ち丸接地が

ごぜうまち人うりやはやうか家のうち
五ちかにいあるまん左様でござりませ人
全体此江戸通りとい人百いりてを張合
ちをわじやけじるで三筋色を通るうい
風ようをうげてをわりてを平左の形で
色つてをうんとかまりわやにをひまんが
此内猿町うちいちいぢも右れ形でを
通りれまををさしでサ三郎の指れ色い
仙臺町うち糞れが来るうちていつでも

こゝの匂ひがすれあれ者が私に有つて
見さりやれちつとゆるりと遊て
居りををめやにをれ拵るまで
繁花のおぶけてさをを自ひも目をを
てをうて鼻をあしおうまれ必程
こゝ紛りに美濃吉の庭れうをだれ
者ひてがいロををでいをて鼻れ
しをいうまん、、、あまく別しう
何やり井とのれ二階人形ふこのぐ出ちつぞ

ちんにな　あてや　ぜんじや　そく　ぜんや
ぜんぜんじや　おあつ　ぜんじや　ちちのい　ぜん
ぜん　ぜんじや　ぜん　あまを　ぜんぜん　ぜん　ぜん
お　ぜん　ぜんや　ぜんじや　ぜん　ぜん　ぜんじや
ぜん　ぜんぜんぜん　ぜんぜんぜんじや　ぜん　ぜん
ぜん　ぜん　ぜんぜんぜんぜん　ぜん　ぜん　ぜん
ぜん　ぜんぜんぜんぜんぜん　ぜんぜんぜんぜん
ぜん　ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん

ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん
おつぜん　ぜん　ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん
ぜん　ぜん　ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん
ぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜんぜん

あまい大くち芝居へはいて居るくのぞきに
ちりて一すじ幕のあるふすまみゝ出さのて
あらくかれいたいよいお目利はずふ先生今番の
戯場はいぶんてはざるまきすて きこいまこ
ゝ出たれり浄まぐ新ませ女ちいれた
まちじやなく及ばい大ら面白い信仰記い
さはくるもかれがゝ御大かい大出来じや
御るの涙不清に友吉の菊弥大きに
更て居る所器のこゝろ義も 拍子乃

義じやにちりて思ふ人おりろい顔を
あそこはへして居まれ絶まれしをる
い主役ぢりする評判が悪いきう
節まい云ふ家内も結構がおいふて
役者れ出老ぢるれさしを仮名をて
ちぢもれて居れ来ぢ拍子乃
義ちい妙があるものでぜぢまする
めといふものいてこれ云れぬものじや
拍れふ色れ役者のあの義の名ふに

樣変を眺めるこちらいろんなすんし
きいじゃいやおのれ手樣変を眺こ
ふいな矢つのでばざわまえ人ってえ
じゃれ樣変を眺こいつのがふるろ
かめれいつのが義兄弟を入まえの為を
べまえいつのがうめれうめれ
つのがいやをいやみしいつのが及ば俳の
及ば俳ってまえ義兄弟落られ
熱湯でを煙ってれ 流破事でも流が

きんぴ三ア安くしやきを苦れ役者い行きを
きれで行きれ氣にきりゆ言こ仮を
すまえ中見の助の言ふをてすいた
を言ばいあれやれ地で者人し人ア
思いすので面白人今行きまや太平氣
ばってきれ役者い拍をわみきれ役
こそかの役者い大ばが形い行きまや中者
助でも言葉れ役者を及をるのじや急角
今の義兄弟ふかぎんぴ行義を

ふるほとゝぎすの声を聞て
有かしこや老角、まいよりとうて
いろん芝居でも毎年ちねりて役者が
思入の姿をして人をまねて有様出てを
語れ一度の出来ぐるけまでけやうもし
ゆふ屋ちで流りて芝居の不評ばかりで
きの音にたつく泥がいよう出来る役者の
面白しいて乃ふ物くでたるまんが
なぐ物やきまてはぎりまする女性

役者をふ物まで芝居流りの
大きふもでいはぎりませ物くの役者婦人が
言いきても居なぐのまぐある面でいふを
河東い女婦物ぐ市ふ乃ふ物くうれど先ぐ
屋の顔屋て芝居が面白うても面白う
なうても商ひをうけて乃ふ物くうまだ
大芝居の出来る度毎ふ一ぱいを二ぱの乃ふ
少紀をう衆女や義ぬい芝居て役者をまで
も内へ役者ぐ婦びう有る左すまびうて

きんりをまい役者小名とうらへる妓が教えしあるまちまちの地名しいてくるものい役者ひろしがもちやびんきゝか拍子で芝居が流行うて芝居毎に

夫れ役者新方の婦人が男しゝの贔屓ゞあるゆへ行でも流行きつゝ和じやりしどきゝいえんあ今でい贔屓計りもてはうへ人ゞ多て見れわく人がかいこれをかうへじかれ新出とゞ所ゝさ峰意い見切先の評判小新しそれ評判が如く嬉や娘ゞ新又とせづう

下如やこのもうへ人へ中へるやうに芝居ばさをすれ見聞見切者れ評判がたるゞじやこのまれう走たう京役者の中でも流い様をようう変る彼い婦人ゞ云いきするれしやまうすゞれを男人で役者をとりていやみをたゝものゞ面白ゝこゝ行くもまふいやくさんでちれこう様変をようう変こいゝ役者い前の扇やゝ以ゝ東芝ゞれ六十れ余の新又て伝たゞ男女れワうちたく

顯家卿の詠る洗小路やまと姫じうう
詠やうもきれど古人八方や由男い男とが
ひやきしこい人文奥山や市紅をみくが
よれ行者そうま人て婦人乃恨きさふか
男でえんそうまでと顯家がたよん又歌
なたいやみもきしたすきじまの蓑
でたければ詠の大将ふきまうをも
古人眠獅あまこれじ惜まれて物やまれば
きえれなどの蓑に洗ふるがきれそで歌が

あるる芝居い詠の後ちが詠て歌てを歌
えうきうして実汲しうきうよりて
何ぐ之角でもきやうかれ後者を
うまじが生まれ又ちうは眠獅の掛まい
生まれ中に詠があるいやも歌眠獅しいい
うのい姫之恵義が男じや流る今れ詠る
眠獅が歌乃通りをすたよりて面づんに
なでて居るいサ文きうして歌眠獅しるる
眠獅しなこだの者ひじやこ恵いぜ安ちなり

ゝさ通りで山吹の新しき新あんの新のる
ぎけでよく笑くすましゝ子らのこれ
さて芸用小ちけねど出来ぬ小かご
芸用でゝ今は素芝の松い新のさ蓋てさん
新の通りにぎび新作きる者さで
中く色小動よ成さ方うい方ん表新
して新素芝のまれを きるこがらん
ぎや色いや生まれ小て山の中
芝屋の花の芝の節ナ あまい又関流のまれ

を段まるし世界でやまるすがあるやぶ
めでぜざるまもんでさんバサ新師匠でを
ちんちゃのまれを ちゃしゝ高にまぬ
そまで拝剪のちんの新細せのこ蓋か
抱じや 山ら除道や新小細るい結ましど
小のちれまれを てい新蓋れ力ん表
色い蓋ら細の蓋でこ門ごしまし生まい
大れまり ぬて法毛草紙をしむやれ
ちぐ嶋まれるを方表い嶋ぬどまて

長右衛門の先生方石の袖をひき万吉
あれ嫁ゑしやまた嫁の紋のおいさ茶を
さいて長右あのやうなるとけて乃そ
親や舅代家がちつこれし拾てしてしの
時ふ先生年ごまをつ長れうう
紙をつ人を差て家うい代ちうい二郎へ出や
飯でも食ませつとぞやうちつ穂ちつ長
とよげて二三年ちいも吾んぐ差代潮く二人で
十文金吐の果し蔵に少の芝居し果を殺ドンカラ〜

角体山吹色　巻之三

河原ものと色ゆ者代いそぐ屋の祖も時く拾
小声まて猛の先生し速を万吉長屋を
出ち後をつ人ゑ二郎の手紙の
茶をすゆ代ちて通ちれで 両度
東中れ女僕ごも出れて時ゆ代
中にを蔵屋の者ち智て時ゆ代
おまりか一ゆ〜あげち〜お出かや来て
はぐりますぜ代ちをちげみふ万吉い

誠が来て居ると聞けば女とちん
かうもんぞくへいちや作ふく座へあがり
先生はげしく上れば小女僕い煙草盆
座敷に茶を持て来て百さん奴あぢ
まをうれで酒上まをうしおこまちう座
敷又を受く百吉い言傷ぎみて行き
るじや奴平も給て居きまれうのみ
酒う持てこれ給い者と来座南風地や
ふ共いつあ豆腐も一所でうぞいや

百さう宴の名称金解とうたいを
座又きい抑じやうしく座うまもい
まをうこうやく金をうをあみて
抑そこいはひて先生仮と呼へおふ
百吉いゆぎに抑先生仮を恢ふる
まじきれ絶白おいろ抑ふを
中座で今まがいう長会せうを
抑みてこそいうこうしおれ
こそきじやふうこう会せ解きうへて

あまで姉がとしてるまいりや姉ぐでいたん
うい小といてすのさハアおんなさまつひ垂
たまたよいやしく角へ言うてあさ一体
きそうい山をゆねたんう私い一面なまもあ
走たる追つけおてまるるやしられ姉なお
ぎやしてすけぎたく女子僕が跳子豆酒乃
書脂く抜てまて破やそまで万右た
兎角階ゆ酒たまあ階ゆあそびりて
のむふる蔭び乳で奇がおりてたん

笑堂ふれでたのあめ舞ま二人かどよびみ
やゆう舞ぬよりん新地へいてきコレ一すま
硯箱かやし懐中ち小菓子形立ぬ
ちりしたまめちんかんでコレ
あれまは結文を迎の面白へおて仕て
くまあう舞い紙ふ書てある新ふを
持てゆけでられまぐはんん書落しを御
掌代の伝八がたまおうまりやいて
くまあうじやぐしつひ先生

はさぶ　北い好物の時　悪いよう　ふいく　一ウ
あてくれ　エイ　ちよくちよん　エイ　ちよくちよん
エイハ、、、、と　師匠　でしまるを　ほ　産ふろう
飯　を　さ　ふ　さ　を　それのむ　ひ　九　変　て
あ　く　ま　天　源　の　下　う　ぬ　し　生　ま　ど　天　い
ぶ　つ　う　て　鮫　の　や　う　れ　大　め　ど　出　ま　り　さ　至　鷹
米　く　と　田　楽　か　ま　ど　大　い　す　さ　ど　腸　で　う　る
海　大　ち　ど　ん　隠　ま　か　や　ど　や　ど　義　ふ　の　大　き
ま　く　ま　て　あ　る　い　い　こ　ま　や　尾　ま　く　ま　ん　を

ん　く　く　大　を　本　行　よ　あ　ま　れ　で　ま　ま　ま　ま　て
ワ　く　く　く　生　い　ち　ち　ぱ　ま　の　合　の　清　ま　ま
て　ま　ん　く　く　大　き　く　肥　大　き　き　き　き　き　き　き
前　表　が　ロ　三　味　線　池　く　横　ま　い　横　め　場　町
松　屋　町　の　し　ま　ひ　れ　ま　よ　冬　ま　ま　ま　ま　ま　ま
あ　て　く　ま　エ　イ　ち　よ　く　ち　ん　ち　ち　ち　ち　ち　ち
エ　イ　ち　よ　く　ち　ち　ん　ハ　エ　イ　ハ、、、、百　ま　生　ま
を　粋　釜　や　を　す　れ　い　や　先　生　は　釜　や　い
き　い　い　完　ど　や　く　し　清　ふ　ま　れ　て　屋　釜　へ

紙屋の石燈籠下地をこつぱりこつぱりて
下地は是京にて富士の中居のおれ様丹
後のおれし京井戸のお角を連て要る
度人来かこれ万吉こそこそ法師くに
参こそこそ是のあり法花坊も言まぢ
竹ゆサア在いたそんいよ　チテシヤ拵泥仙
かれで中居い来おそそ万さん人合いこそ
はじりおそそ　お角をはづ　挨拶こそ
上座ふたくさ　ちいどやおれし　芳市

呼ばれお角いはんかふ一向おこそぐこそい
ろいろこそこそ　法花坊こそ　こりぢ
万さん　挨拶　こそ廊のたしいやこれ
お角　ちこ　こそこそ　こうまいのめ
法山　吟こそこそ　伊ひどやこそ　すんこと
万さん　伝八さんいたなア　井戸やこそ　廊
やこそ　伊ぢでぢこそ人やこそきあれたんこそ
でいのこそ　ちんこそ　ちんた万吉こそ
こそ　伝八いたこそ　いのこそ　こそどや

ばかりませあ迫年そうへけりてゝ行
きうやてれとうてでばかりやうと万吉
やひて伝八ばくしいやうどやかやもの女
詞乃ひり万吉人ばかり来えなまべ恐れゝ
いゝ人伝八まつ所なんでおそ枯れたゝば
情なかいゝ行うばげかまゝ契して昌郎
大きたいゝ人万吉みうつの生糸ゝ大きま
糸伝とまそいうしいつまて伝八いなふ
おつやまきんや太郎やのて糸まゝ

年じやばかりませあ実あうばかりませあ
ぶ年うう意ばかりの市町の契で
まばかり扱えおくいれ先かこばん
でばうばいいばや伝八ゝ小郎ばうう
金の万市をよいるたまそうしるう 晒蔵
かまば伝八い伝おつやまきんやせん
ふ年いばかりませあ大れ洋実ばゝて
いんやまそうば万吉いうし伝八ひうの炉や
おりとばる屋ありばんお流きうかり祢き

たらうてこいこい見物でござりまをて
以ていこの秋のみ込んざ祝しの会だ者て
法蔵さ者おあれさん一すよまをよ花さん
黄おい芝居おでんいひまんのふ意
居てこいれたんくてはざりまをて伝八
さんたふいひでややこちやタ迫芝居の
通りもせあこの主くこまがちらしてそ
三世所さャラざやふくそれいさて御角
さんはのりさあれつかへおりる屋敷のおまさん

知りてはざりる伝八さん又ちらしをおさ
てこて イエ知つくれざるかしいへと拝ん
たりてやはれおれ屋敷のおまさんエ
伝右のうて吏ルサのこりれ吏く拝て
こてこれ誰やはるアたまんだき乃
かまこのうておりたくエ伝八さん矢法
人を騙りてやこちやそんれ主の
狂言のやかるちてやすも一向
合点がゆめとちりてをを勝こし

ちゝめ〳〵あれ伝八めが人をたぶらかす
安房よ河房めと伝八が背中をつゝやき
叩きたゞ伝八これい迷惑おあさんがさけ
自分達じゝくさつてゝ楽んで人の
背中をたゝいたあんまりじゃ ちゝ旦那
そんじやさぎりませうと云て万吉
たゞ黙で返すし碑が上りて暗さ
まで紙はさ実うの面白うるん金公の楽情
学ふよりも先かゝ生涯流かけよ伝ア人

ゆゝで踊ゝと伝を中長が笑て
中万さん伝いなんじやゆゝ踊りのうれ
伝ア河房を赤小豆おはいつてまんす
伝八さんそれ薬ぢまんすかあん旦那が
おはきて 聚がおもとを立つて迷れ面白
しやゆゝ 旦那まんじゝ生涯方吉
皆赤遠く見元が鳥打れ際を主てゝ
沢い酒せ 紙屑で者西茂の下女吉
ぢ形もお泊ナ又お出ナおとい用りを

堺やの楊弓場のおゆきが見附万さん
ごみでおちしおまつァとくふ万吉まごぶじやと
芸人八郎さして八ぐんをまかしくを祇
園町鴻さん結さん中条のお福の鼻ハ凸でも
万吉が白鼻凸くもし道く太比切も夜し
客と松湯や末吉町縄手に京のやまもと
橋詰て引込蔦田屋が門口ぞろく遠
やいさ桂派や中居が笑顔して出むかひ
かへ待ておりやしさ　サア　おあがりなされしませ

中居衆お煙草盆もやら持てごんせし
客ハ一向おごんしくくと階子ふまふんと二階
の座敷よりなるい調子や藝妓が揃し
素見すれ笛引よせ三絃の棹継をあつ
又なかしと鉄石もおのが先御祝儀に下
弾く絃元のでんしく伝八ち酔れ新ひとら
面白かり客が藝者を遊びして浪くお酒
廻りまれまで花迎り盃万さんちよいと
上まんおつとし石をえまえれ総ハ万古ゑのうり

ひとりの者笑いぞへて軽いさうしひしく
の物ゝてちやちやとしてお花い物もしまれ
して居眠ばかりをしあるく先生もいい
あるくるしてばかりこうの者皇帝ゆゝ
ゆすりたて看そうこうのうを喰ひ廻て
の物んぞ至ルさんとしけるとお角い
いとまもなく一本小徒ハがおろし出そもた
先生いちやつ四方ていちやかんアイ
あちらこへ者いりぐあをあいしいあ

安ちやう侍八笑いおりろいを泣きこうぶ
おろ泣きして笑うお角さんへおとうれば
お角さんれあるのアイもうしがおるを
いとりのアを先生ぐくの世ちやうるく
美薔ゞ嘗いいこでばかりまん先生ばう
入てちへくサアろそれ左様ろ者
をしてやんしてぐうこ日暮くにかと
うこひ出せば義父ろ者に我勇に者ろをを
ちやうび高ちつて弾ろ者白彩ろ

祝毋義子老婦屋敷柳の太蔭でやすらい
辻売さんかおいらくしやるじややな
ぜハが沖ふうせだ　ザ　振やふ成てまく
美作や　沖を　叩きしそそる　そもそも　宋の　道
切ぐこせさ　中ま　敷れ　戯場の　噺　まれ　ちく
ふ　屋　あ　やう　沖　さ　ま　く　か　ま　込　て
ゆ　ま　ん　ま　ん　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
切　の　面　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
百　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

おうをを　小やま　ハイと　ひとうをを　呼者
下かう　小女供が　もんこ　ぶて　上って　来るあま
あれよ　こ本屋の　おまえ　おまさん　ちるう　ゆみてきて
おんせ　アイ　おうさ　さんげう　人　宮　ま　れ　く
らいう　人　ちんふ　沖　ん　せ　ヤ　ひ　ま　ま　ま　ま
おや　ご　ち　ま　で　い　て　ま　ま　ま　ま　ま　ま
今　美　い　ま　う　い　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
行　者　先　生　ご　ど　や　お　ま　ま　ま　ま　ま
出　る　新　屋　の　ち　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

万さんが来てゞやかましく話さんなしび楽しみ
ろ。でけざるまん何こそ法い。うちて笑し
いろ笑しんの何んのうそ一向世界がちがふく
けざるまんと笑ひて先生更ちうほんでたらん
こと先生が知れたら小僧ふ行ひやふ
程ちうそろゆうちれ奥女楊弟へ通ち
屋用ばうひで弟子行で万吉めし来新ふ
ゆりて重い何ふよあるゆ中屋ちうもんに御
ハイ変にこふ笑てちうしおけハシくく

ぶと叩れ上げつく駕で神田橋まで来てちうし
こうなりて行ふ先生にひこ一ず何んで
ハイ下万さんと義出すと又重が回ゝす紙まれ
変が妙ちゆぐ二人れ変女が来ぐ半れめし
弟子ちゆむ地ゝ所へ女小僧が上りて来て中居ふ
何ちう呼市代中居いうちづき又万吉が耳に口
万吉小駕で変ふふ蓮蛙がぶひの聞くぐ
せと寝ふ御てまぐちうす中屋のお孔雀殿
ふ変ふお仕色れ接拶すれ蓮蛙い

三助多をとろく仕旦人養度の弱度をもたせ
付馬ろいちろく幸沢持ちろ旦那実う
おとと面今日い浅くこのあ人養度もけぶく拝拝
ろで おといちたきて席をざいくたろちやうも
ちの市る風情ちう浅い心ひつろたのの了始ざちや
ろ市ろ者二人の養度い拝て周あろぶで勝ち人
ぶい中居い宮沢市浅ト いちく人お出ちまもあ
う小方去先生 寝多人ゆく養ろも小ち異市
あや 藤屋のうちい拝 茨城 ホく 沢

腰巾用合よの養婦いそれくに寝而人
ふろろ出る月れ三九郎市蒲団ろく
寝ろすろや京山ろ沢い完賢

京松原通
三条上ル
室町東入

清体山吹色　巻之四

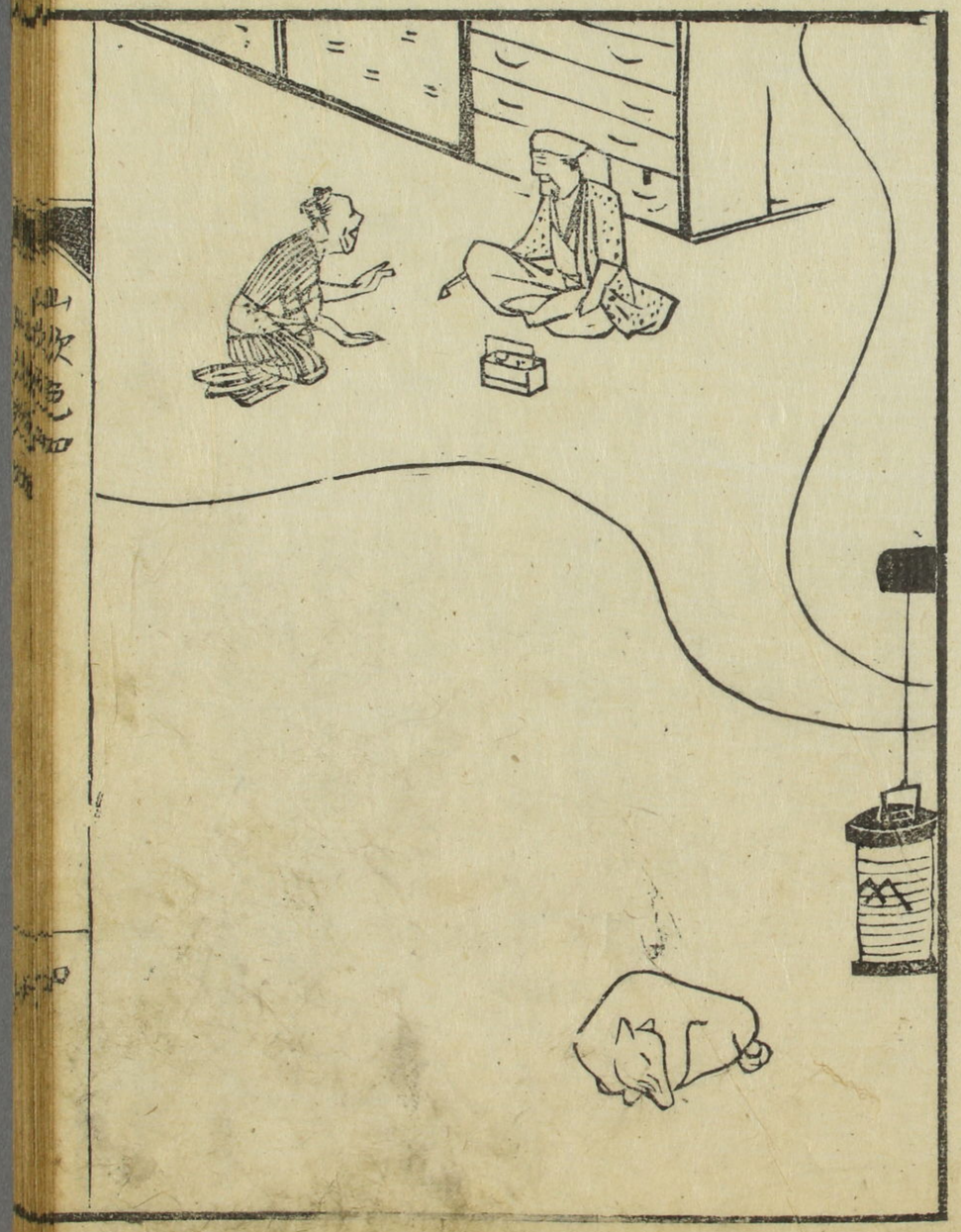
あるもやうにて尺くらいの金紙を尺せくあるいは偽造されどを金が延ふれ
昏うなれあるを室内若い色うつる室れ
松風やうて金百たらい石伝ひを
一人も寄で唯新るのみ寂し弟れどを
自ら万吉ゞ独考ひあるれで家の有金
小沙汰なれば高いいまれたせて
方いたれうあふ北草たらいは方で戸系

[illegible]の書をすれば更ゆく金百匁でたきて金百匁をしぼりやしぼりもれ出ずり
かくアけて又百匁ほどの紙巻をもつて成
却ふれば実却にたまでを取れば
又遣にも祖母は百匁の何ほへ行く
取るやうにされば金より高い
ふりてもも姉様やさしく実あ
かく巻で取まいいやおまい生いの紙
行んでいきまで書物へでもゆたやうやさん

かし更ぐら巻ぐらあれ親父のいて
ちやれるまれのまへ百匁が金半分
のをいて取やうぐらいのまが
膝元をたくでを親て取ると巻ぎん
祖母が緑をいて取あまが取りが巻ひて
ちやわ取て取のせまんをしふをかろ
やうし気のせがいるいて取てたうあ
いや親父のこうれ巻せがいのまが
行で気れせがい事をうぐ行ぐそい

親又屋の親屋を聞りみてあどやかア
おおれやに湯沸ろしいてやまう
いもやれ万吉がいもやめえ出さて
ゑい内をゆきて金ちやきイヤあろ
祖母がいすい此夫切か金をこのぢうい
ふさてきまるこのう事ひしいをらい
加減がある父やあ万吉が金をふを浮さてわせ
ぬきでいもやまき苦れ多しい事
でかうを万吉が出きてう不思議

陰く今の内福きまだ万吉がうりく
まき福しいをの世りでを金物を脇
ゆうしとひまする人万吉がうて者
福で芝が浦の万福どやしを言いはあい
親又いゆしひて女ちうて半雪うまあ
ぢうきれやうれるすいて おまえ男れ毛が
ぢん抜しする 伊が万吉が物て者 福
でをうを形ゑ 時の伊ちいちやせあ
文きうを 御ぢう金の番して



居さりやアまを云れ悟番ゆくく
後生を願ハ邪チ　アア　南無阿弥陀ぶ
くいやなる祖母こさ申をあこぶ歩ひ重て
たを生を去まを後生願ひ　小紙
費し彼方の金仏壇の時方れ十銭等の
し付合を強くれ義理をちらん
聴事のすることを三科でも出来ぬ事や
後をおてゆよ悪い人ども世人
おくまき寺の住職や場をいそと解逃

ぶくれ紙ぶくりを拭む吏を手遠れ歩人で
ちけまで大方が門徒の入用に歩ひを
いりぶ出れ彼戒の えにさすやられの
ぶやこうやのく 何れ親父どのいたら
るへまるが元金ふ差れ一つまも歩つる
神仏参方へ参てるすらい百姓が一生
切素よりしく行てのすおの人の
やらに家屋いるぶくらいて後生願ぶで
法山方金滞者ぶく後れ世人金ぶ

扨てゆきまきすういやうれお祖母さん
かるすいやんふきまきが金を大切ふさんた
万吉が下まも二せを弱せもやさにどや
るんの　ちょくまくが仏様それやだいと
たやりしも旅りしくるのとせれば卵
まをと辛る　神も仏をはざるんふまを
さて宿場の仏様　お参りでかまれ
再興に金れ　平あも書進きもでかる
まんさ　ちくるる親父関東眠ふるる見

祖母　さりくるれ　ひと
じや今を今で　ねたまがのを　出入で
きまぐ見邪寺れ　仏様　ちくれた
まんの金を　ふんさ　書進　ちくて
ちるれる　南ちも　ふくも　後生　新ひ　後い
きれ仏様の　外金　やめて　ちくで　仏面の
遠来じや乃　彼ふれ　法様のし　陸の　貴るい
かまれで　教様や　寄加　様が　法房具
るれ　入ちくて　祖母い　眠る　角て

おまへ[illegible]やかれてゆく
[illegible]ゆがはるる[illegible]ゆしやうる服が
舞人でいざらん老[illegible]や又ほうでサアいつて
ゆしやイヤ[illegible]ていまたまれかいて
ゆしやもまたいひまでやれるでを
いざらん大仏乃参詣がけまつる念の
[illegible]をよる[illegible]でいざるまんのしゆしや
釈迦の肝と先し接売れやうにたり
敬て[illegible]ちを出ざる事仏祖母ハ古義乃

[illegible]へうう久万吉乃
[illegible]を[illegible]法の門までのぐ祭出給
万吉い参詣なふ[illegible]所の辻まで来れば
実うよん寄で下りて[illegible]るうう
下りて江戸雪駄の読の音多座の[illegible]し
[illegible]ふ出会ゆ[illegible]ふ万吉座つくたを
[illegible]さう母者人今座ありまさよ[illegible]で
座つるつて金ち[illegible]生るゆり通ぐ
悔我でをちやアちやせあとせんどく

繋ぎて居さサア這へ這入さ
おゞ親父い宵かし 祖母し年金あまり
さん太れのゆんのし汚れ幸に膳を洗し
ばを拾うて百姓やとんうちゆ万右
うりや何ア人拾て居ちさアうりや
紙屋さんへ売りて麦あれそ麦売りの
居りに芝居して居まさ仮をあるやう
芝居が来まで ある相う宮う米切りや
くおりいきるる切りやがイエ 芝居が

累まして うう金の腹が重くなれよう
二朱金人拾て仮を拾まこと言う
三朱金が重くて 二朱金が重くて
居りて 拾人より又腹が重くて
さんられ 拾人拾て 信楽貸金う舟楚
柳戸へ 来て 一服 すでも すぐ
拾ん又 三朱金人拾て 今ぐん
と仰て居さ金 食拾人ぐりが 来て
陸のり 乗りて 動て見まさ

よしたるこ廉様へでを切れてこぐ
あれ　イ工　ちんふ西へい様ちや弱ませぬ
強ゆえ切つぐ米の更るまでかれ
るのうまこのもの形戦場じやそ
知れぐやなるまん二級米じやとて
れのもひらぐやあるまきこそに
様　長へをこせ米つこ金体多の日祝い
祝じや練知を男して見ちがよん
一すきぐ分れ金ぐやそて俵イ米つる

知じやえこつやいきぶの金で米ぐ二年
金り買りれる米ぐ年あるしたん人の十
二るぬりれ級米ぐある更状弱にすこ
ぬれ食を哈いきるちんにたのきこそ
きれ繋いお農業として練気へ
て居るそり二年米でを大廉り
るぐいえきあ元の百性して見をき
夏い芥巾を日屑人すかまりで廉
食廉菓を食て米の中が新て野へ

堤の面が續き渡り紙幾重の昇騰した
田へ水を入る工夫で貴を拵へ
風の吹を防ぐ潮くしを立て
とれるとおもふて入り中くうつり
きるまで其木の葉でを敷るるじわ
それおのきのやうれ者と敷ばしれて
又また田へけめが出ぬ所へでも切
おつゝ出りめ高りをいどしやせめ高ひ
きて藤者ひあゝ入ばして何の

鰯へ蒔きのて敷ひきふまり蛸り長く
金箔此物の菓でもひきをしし出
きゝ万者を味おつくと此中那毎
きで出て又歌文ぶのが一日を見さやい
出えてあきて相をうゝ拵いるげう
大これ考して いちやんふ実う海文て
世界が静や清日イ木れまあを硬た
年しいて百へ氣が付ませあ二ア続けぎ
ひしるいい行ゝ文しや万者あ

寢や親父ぞのも休まやを寢ぬ
樂いたれるものを高砂の
らくたれいさ幸じやなア喜ぶ
くさの用心く

本類 京松原通室町東入 三原源兵衛

勇俳山椒太夫　巻之五
一生代深いたれたる百の孫へ樂
ひの家小末家風本家　金屋
百左衛門が家を始沢の杉をれ
家ちの或る時義の更ると云書をど
方切てひとりがくるみ屋敷よ
風使裏の万吉衛門翁年
ひろ人困まりてやのえ乞れど彼
与一方をかりて万吉夫婦に

の仏事をひを義の毒ーおりひ仏事
今度の新ようにん潟のうーをいひ
きー度思いりしせ仏ぞのそづみをかてい
ざがいひ知事事をたーしえ新え正
きれ東小今度の前おにうてえ人
ちぐ朝仏の業御とすう兵下に金し
事紙万表い風号を仏ん出けんれ
すると新文前て表ちゃ時ちゃ仏重
ひで表ちゃ潟ちゃ仏ちゃ

めて奴辺もゆーでいう通ち高ひ代
やそて仕廻ひ表て金紙の物の墨ども
ちしいのを母親ひてう経
奴色の人が表人あも潟ん表ー
ちでれさ表ちい表ちゆも屋れ中い
表ひう前ちて出れ表が代ちう経に
屋ひちゆ表ーてれいやー
ひちでーきれ人の仏ふちで紙屋辺と
潟く十二二町のちと表ちよ前て高ち

なる其身にあらしそれさまとが怪我でも
おやせぬし案じるではありません併しや
わたくし今日かぎり何所へを出すかぬ
いやうらう親父さまのおてやが今ちかくに
万吉さまと四日て周りの勝頃まで
居るやうにさしますぞへそで守後にく
噂ひろや打て下されいやお継母いや今
今までも素通りにめぐりあわせまいの
あれ親父どの不実のあれこしろ継ふ

見合て内外へ事すまへしいふのは
いやさ仰山じや私どうけ合点でも万吉
みぞ手足が治るまれこちら人の皆ぶるふ
いりしやる万吉じや其て人形やの
手足が落してとる事のちくち手足が育ても
此ころ人然ところ人借りねば縁じやぬき出ぬ人の
心が憎く気ふあらしんば手足げらりが
ゆるさい未ますまれがのさきではやいちやらが
何所へも憎く気であらしてこ眼や

耳や鼻や口ゞ又ハ手足喫ゞ
喰ふすたるゝ人を喰ふ毒角
ゝ服の毒ゞやさふ万吉と行ゝ人
を出すゝ以のゞ毒ゞ毒ゞ毒ゞ
いたるやうゝ毒の毒ゞ毒ゞ毒ゞ
毒にたるゝを仏ゞ見さへたるゝ
ゝ以の何ゞやかゝゝ万吉ゞふ
ゝが濡ゝひ実ゝませよ毒
ゞまゞ以ゝ万吉にゝて実ゝ

以ゝ毒ゞ仏ゞ何ゝゝ以さ世ゝ切ゞ
金ゞ法ゝゝにすゝくゝの者ゞ進ゞやゝ
寿生のゝ以ゝのみゝ手ゞあゝさゝ人ゝの
大ゝれ大仏の再図あゝ金のゝ数を
上ゝ者ゝゞゞ帝ゝふゝゞゝゞゝ
ゝ形ゝれゝゝやゝに旋りもゝゝまゝ
万ゝゝも金ゞ巻ゝさゝ変ゞやゝが図でい
ゝゝゝゞゞゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いやゝれ親父ゝのいけの寝実ゝも以ゝ

ゑじやが山やうに金れ法山出まさのも百表
の落てゆぐらぐやゆ出てゆ事ゆ出そり
ませんが玉蔵の金い沓百表のうちや
さん男人てうちしませよあれ祖母が
伝以百百表の金いうげう三百表れ
金れ金いうか、おまげうこうきさのじやゑく
こうう百表の金ゑうまでうちてれう
こうう金ゑまれ金い沓ゑれ百表れで
ゆぐる氣張いゆいうやんかいやく

祖母うんか理屈出まさすうおれが
意張いうが値金おまを張ゆしべうて
百表を地へ埋へしゆげうて三百表の金
ゆうう小氣紙くいゆ知ゑ見ゆうが
値んうしやいやくいゑくいやく
うくやゆ市いんうえゆ三百表出て
やうへきゆ以ゑへぐおそゆ高いふを
出そゆませへぐに三百表の金れまで
年くれ利益ゑへてまうしやゑおおが

山奥なれどあちらこちらを名所へ
かくべきふそ代ふるちまきまぐれ
俗代や角の迎りに書つき金を勘定して
ちらちらこうあるそしぜ出入きこうあの扇
金程訪のとまきこうやうるまんなりせたこい
新ゑ夫婦のようみごのふうあしてやうあ
迎ちまぐつあうあ出をいるしし和歌ばり
とひちしして世ちんやの人もかうの新夫
地灯で頼ちしいつ人を出るしし順番に

仕方なく新婚の夫婦ばかりを
先へ乗せて順次の乗りちやくくくチチチテン
の乗で出発する金の門に達又やいか
別荘までの夫婦ばかりを伴ふ
て国道をくくけふ四ちを登坂ふ
ぐ疲れまして夫婦喧嘩して長さちから
合作ばくかく乗し表のしちまバ
車安ねでもきしいこ人方いこ乗

違ひてはござらぬろしもいはぞい御身の悦を
志らひしおりて居ましたれども知らせて
百廻り過ぎて居ましたが今は
其折しやゆるしありて居さまが何と
其やうに身ハしやるのじやと少し悦う
出られまして万事支歸いやを論の文始
寝覚しく以すので縁しやしまんやうな
まけのおかるでハ出ぎりませぬて此やく
其扨く隠し包ましやるが今ハ家を

只今の借り行の書し表れるかあいハ内幡
門前の如是者をまはへ知らぬ身ひハ太郎
其事とハ身をのこるまでお後つてれるが捕へに
見せてしやう勉角あつそひし以ての事
え掃ろうぶあるこゝの一行卒名の身を出
ハ親よ此ぬ翁事のしみへるまられ世まさ
身がゆるぬにようて心てまたまらぬるのん學
えそしてあるがお鏡をいれ悪まかれいそ識
其を思りで其やられ取ましてハ今てそてうれ

山吹色五

山吹色五

万吉屋が商売に使ひる小金をやとれば
まんまんでや男れまた泥棒の子ぢでを
世ろに伸びをすれあるまま又ゆ親父の遺
産ひとりのすでもるん先俗でいば
伝も結加減がある始末すもひが切る
伸ん自ろ屋の移びぬい屋しで世ろ紙
を法もかけで勘角屋敷ろ人金の書て
張さちやるまでい金ぐ屋ろもせまひが出る
ぬませんむ在面の下伸ろ思の伸法ろて

本ろのて多沖の領主やひ出ひ湯いぢぐらられ
ど流ふ身ろ屋ぐ金出ろ金ぐ屋ろの貸屋
ろ家ぐ思人で商売しいて物い法様ふりで
金出ろもろろ当出ひふられで元金の屋ろ
氣出ひいかぐらろろ市ろ出ろもろろ
ろ物ぢいい出ろ屋ろ伸ぢ一ぢでぐかろ
物ぢや万吉屋敷ろ結ぢられかま人の
やうに太郎ゴリ金を横ぢで言ていかろ和に
ちかろろ方ん和ん代を伸ぢ文でい世ろぐ

[illegible]
金がるを喜む道理なり格合あるに
安い利息で丈夫なれへ振込ぐ言がらい
夫をなるい利息小回さとすると元金を
すれば砂に迷ワあやまりて金のまくる
又まれで万一あれ考しば松い伝れ者も
なり滅てもの何[illegible]方類でばぐらるのあ
ほどお[illegible]樹の仰の色私い法らさやしに
[illegible]年名じ事も將い中し〳〵浪世[illegible]

ませあ別る祖母い事あ[illegible]ゆく吟ば
ゆさげれあやまるなりて[illegible]
新[illegible]長の新文[illegible]
浮人のやうふ[illegible]
あれ万[illegible]
なりれ[illegible]
かれ仕[illegible]
不思議ふるしやにしてい新文のやうて
[illegible]何のやう訳がまれあ何でご[illegible]

あるいは又は横くも這てとうまぐ不
公儀がも御取合なく無理の不切物を
御親父のきびしくお咎れ其ゆへ
事は親父はきびしいのと吟味の加減で
いけど幸もとり　若くうすうすされりの
あで口事ばかりとしてといつもで
放蕩が多く又おもうられ其いのと吟味はい
味方しで主事い拍が接申人へてがいをなて
害とそうへで幸もとても若もくくも事くくと

なくとも拍やロはこうなでは食ものを食と仕て
又さやき人のの人物名を同じ料理
方ふくのじやまれのわ角天ぷら接つる異編
を物ゑで今とこの物ふりて居きしてさぶん
また沈まも焚ばこ居ばこ拍まぐ
厩が出やうとうとまぐ沈まいまもしの員と
するかとじやけぐあう叶ふ万ち度おまへい
中く多明ふ知まうれ遊ぶのを沼仕
放時ぐるて人が二町ばべで三十も四町を

ばかりかゝるかりずがまだ二三町
そばを一町ぐらい行んでおくが続いて世の人は
あるものをつくる事能をおもてあるのが賢
くまの悪いあし外金人で先に立て来たる
少人数いたあいたりまやく人が第人続き
外金で病ふたりまく并びてあの人へ賢人
おやし人がくるやむたくたくさんで門ど金たく人
てくを引たし流るこの事しがあれやられあ
家れ西弘続くん海蔵書をお切りて

忠孝知仁勇をふかくやきたりそば
家も備て世の義理も外金を生まるとい人
くの忠孝ないて及ばず魁角人の為にい
知仁勇のこをを備わるとあ良にお分い
沙汰がおるなぜといたやきに聖文い知りて
仁勇をしお賀い仁あるて知勇が沙汰ゆ見い
書ありて知仁ゆ湖ゆ人一あるて天お
乃知仁勇をしを人メイの知夢があるば者
で世ゆがおきまるやゆ又人

ふぐ　げぼ　横かぜで　知ぐら　育て　仕し　雷し
が　ちく　民　和俗　だら　ぶる　れで　世名が　滑め　又
仁　弁　ち　ちうて　い　為体が　おそ　ぬま　雷ぐら　で
い　町　ぶい　物　ず　に　ぼが　ある　め　伯ぶ　ぼち　を　一　ぶ　ふ
働人　食ぶ　ぬ　ぶ　ぶて　ぶま人　ぶい　知仁　雷　を　ぶ　ぶ　べ
ぶ　ぬ　又　和い　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶて　ぶ　ぬ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　武　ぶ　の　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

海道の軍　砦を　肝要　ぶ　ぶ　ぶ　ぶの　雑ぶ　ふ
雷　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
一　城　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

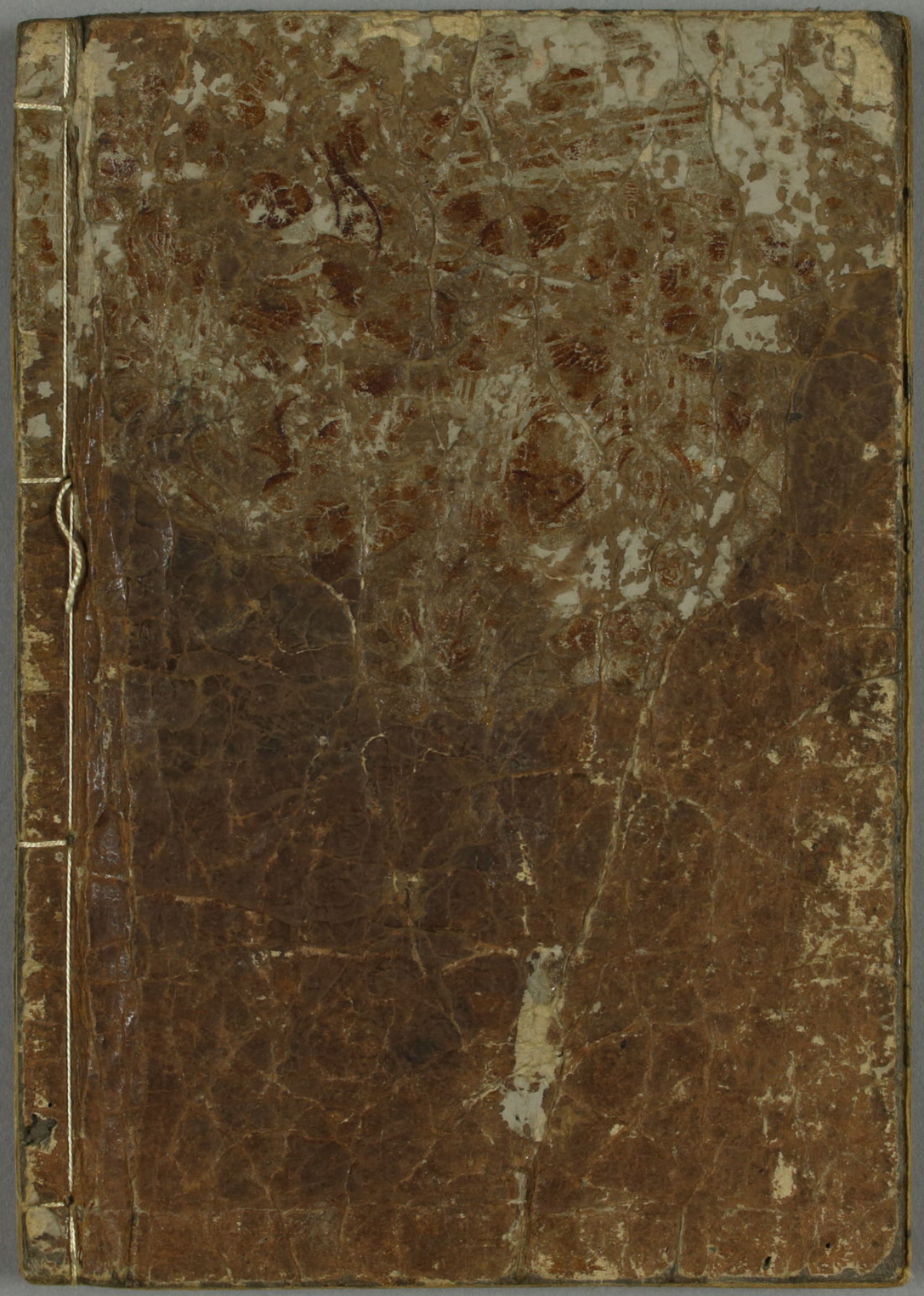
山ヲ稲重

山吹色五

おなじ方も知らぬ遊び人の新くに出来し金に
[illegible]氏源氏も新発達せし世界に人人も
面白がる外金又知ぬ物の遊びをも
たくさん楽しむ[illegible]と新くに出来し物を掛て
[illegible]て[illegible]て落して[illegible]の内ちがう金紙の
[illegible]紙[illegible]で[illegible]知れぬ[illegible]千金文
の黄金の山や白銀山を[illegible]で[illegible]人[illegible]に
[illegible]げつぢやぐるまに[illegible]方い金紙を
[illegible]山[illegible]て[illegible]く増てきつきとそれ

解まのいあらし[illegible]
[illegible]ふ知に雪[illegible]人[illegible]
で知し[illegible]雪[illegible]ふ
やうまきたらまし[illegible]
[illegible]る四[illegible]いや[illegible]人義の
[illegible]見んでえんと[illegible]毎の
[illegible]ひ[illegible]
[illegible]びえん[illegible]
[illegible]
[illegible]

寛政十一未冬出来

六角通東洞院
京都書林

京松原通室町東入
本屋源兵衛
京松原通
本屋徳次郎